
ナイトハンター

蓋島尻歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイトハンター

【Nコード】

N5235D

【作者名】

蓋島尻歩

【あらすじ】

都会の片隅で凄惨な連続殺人が発生する。警察機構の必死の捜査にも関わらず、犯人は杳として知れない。警察捜査は行き詰まり、事件は迷宮入りの様相を呈していた。マスコミは、いつしか、この姿なき殺人者をナイトハンターと呼ぶようになるが……。

第一話

梅雨の晴れ間は、流石に湿度と共に気温が上昇し、ここでも軍配は太陽の神に上がった。

行き交う人々が身に纏う衣服は、否が応にも余計物として扱われる。

上着を片手に引つ提げ、長袖のシャツを肘あたりまで捲りあげて歩く職人風の男。

上着を小脇に抱え、ハンカチを片手に引つ切り無しに顔面の汗を拭いながら、足早に歩く小太りのサラリーマン風の男。

サンダルを突っかけ、流行のジーンズの裾を膝まで幾重にも折り込んで、気だるい様子で歩を進める学生風の男。

三人横並びに、すれ違ふ者を避ける事もなく、何か言う度に脱いだ制服の上着を振り回してぶつけ合い、キャツキャツと奇声を発しながら下校する女子高校生達。

そうかと思えば、ベンチに陣取り涼しい顔で読書と洒落込む若い女もいる。

平日に、この都会の一隅にある公園にやって来る者の目的は、大半が抜け道であった。

大通りの向こうには地下鉄の駅があり、周辺の通りを回って行くより、この公園を突っ切った方が近道なのである。

この公園を行き交う“人口”は、朝と夕方に様相の異なるピークを迎えた。

朝の人流りは、八時四十分から五十五分の間がピークになる。夕方は十八時十五分から三十分の間がピークだった。

朝は時間が早いほど人の歩みはゆったりとしているが、出勤時間が迫るほど人の歩みは早くなる。つんのめって倒れこむように歩く人もいる。夕方は、皆ほっとした表情をしながら、足取り軽く家路に付く。

こうして朝に夕に、サラリーマンやOLで公園の歩路は渋滞し、

車二台がようやく擦れ違える幅の道が、黒だかりの列となるのだった。

その様子は、さながらアフリカの大地を、一日中餌を求めて目的地に向い続けるヌーの集団か、気休めの初詣客で賑わう参道のものであった。

夕方を過ぎると、公園は一段落つけたかのように人影がまばらになる。

小林は、自分のサラリーマン時代を思い出しながら、草陰から小さめの折り畳み椅子に坐って、こんな光景を観察するのが日課になっていた。

小林は、年齢は五十七、定職を持たず住所は不定。浮浪者然とした生活を始めて五年以上になる。

小林は、もう半年この公園を根城にしていたが、小林にとって、この公園は都会のオアシスだった。

都会の限られた敷地を無理やり割いて造られたようなこの公園には、溜池、植樹、置石があり、広々とした庭園の雰囲気を感じ出していたが、それが、小林の郷愁を誘った。

それに、この公園は、朝と夕方のピークを除けば人の出入りは思いの他少なく落ち着けた。何より、この公園には他の“同業者”の出入りがほとんど無く、面倒な付き合いをせずに済み、孤独を好む小林にとって打って付けの場所でもあったのである。

公園の中には東屋がいくつもあったが、小林は歩路から奥まった草むらの中にぽつんとある小振りの東屋がお気に入りだった。

東屋ならテントを張らずに雨露が凌げ、寝床としては格好の場であった。

小林は以前、中堅の商社で管理職の仕事に就いていた。バブル期は順風満帆、会社も個人も潤った。

ところが、バブル崩壊後のことである。小林は、人員整理の仕事を任された。

それは、苦勞を共にした同僚の肩叩きをする仕事であった。そん

な仕事、小林に出来るはずはない。小林は、潮時と思い会社を辞めた。

子供のいない小林は、退職金を元手に、女房と子供相手の小さい雑貨屋でもやってのんびりと余生を過ごそうと思っていた。

だが、その矢先、女房は不運にも交通事故に遭遇し敢え無くこの世を去ってしまったのである。

小林は最愛の伴侶を亡くし、生きる気力を失いかけた。一時は自殺を考えたが、死んだ女房に止められているようで思いとどまった。それから、自分の人生に区切りを付けるかのようにマンションも家財も売り払い、ポストンバッグ一つ持って浮浪生活を始めたのである。

退職金でマンションの残債を清算、売却した後、手元に五百万程の現金が残った。その現金を銀行から小出しに、細々と暮らしていた。

現金の目減りを補うため、時折日雇いの仕事もした。

日雇いの仕事は、履歴書も住民票も必要ない。仕事の口さえあれば、いつでも稼げる。

小林の年齢で、不慣れな日雇いの仕事は辛いはずであったが、苦にもならなかった。

最愛の女房に先立たれ、すでに両親もこの世になく鼻っから兄弟すらいず、縁者といえbaum二十年以上行き来のない山口の遠い親類くらいで、この世に何等未練などなかったのである。

作業中に偶然の事故に巻き込まれて死ねれば、どんなに気が楽だか知れなかった。

何ら生きる目的もなく、それでも生き続けたのは、浮浪生活を始めて間もなく枕元に立った女房の“遺言”だった。

『自分の寿命を全うして下さい』　そう女房は枕元で涙を浮かべながら言った。

小林は、この言葉を唯一生きる支えにしてきたのである。

自分の死に場所を探していないと言えば嘘だった。

以前、別な公園で浮浪者が数人の中学生に髑髏にされた時、その公園で何日か過ごした事があった。だが、その公園ではそれ以後何も起こらなかった。

小林は、人通りがまばらになると椅子を畳んで寝倉の東屋に戻り、ボストンバッグからコンビ二で買ったにぎり飯の残りを取り出すと、啄ばむように口に始めた。

食べ終わると、小林は『ふーっ』と溜め息をつきながら、何気なく夜空を見上げた。

闇夜の天空では、生ける星も死せる星も、同様に輝きを保っている。

草陰の向こうの、通路にある水銀灯の下辺りから犬の吠え声がした。小林は、水銀灯の方角に視線を移すと、いつも来る犬の散歩のおばさんだな、と思った。

唐突に、パトカーがサイレンを鳴り響かせて公園脇通りを走り去る。この辺りでは、それほど珍しいことではなかったが、小林はいつになく動揺した。

この時間になると、公園内は人通りが殆ど絶える。小林はその日に限って妙な心細ささえ覚えた。身体が、ぶるつと震える。

小林は、七年前の結婚二十五周年に、女房とペアで買った腕時計を見やる。

夜十時を回っていた。

明日の朝早く、下高井戸の現場まで日雇いの仕事に出かけなければならぬ。

小林は、そそくさと寝袋の準備をし、身体をすっぱりそれにくるませると、東屋のベンチの下に敷いたゴザの上に、枝から落ちた芋虫の殻のようにごろんと横になった。

夜はまだ肌寒い時期だが、寝袋にくるまると暖は丁度良い加減になり、そのままうつらうつらし始めた。

第二話

翌早朝、その公園は何台もの警察関係車両と、多くの私服制服そして鑑識課の警察官で埋め尽くされた。

都会の片隅の公園で、惨殺死体が発見されたのである。辺りは、一面血の海と化していた。

被害者は、この公園を住处としていたらしい浮浪者風の男性であった。

現場には広範囲に渡り保全のロープが張られ、その前では、大柄な制服警官が物見遊山の野次馬を制止している。

その脇では、数人の刑事が発見者のジョギング愛好者を取り囲むようにして事情聴取していた。

鑑識の第一次所見としては、被害者は五十歳代男性、死亡推定時刻は午前十二時から一時の間、死体の損傷は激しく首から上と胴体はほぼ切断状態、また上半身は胸から背中にかけて十数箇所、切り傷があつた。凶器は、日本刀のような極めて鋭利な長刃物と推定された。

周辺に抵抗した形跡はなく、被害者は悲鳴を上げる間もなく犯人に強襲され殺害されたものと見られた。その残忍な殺害手口から、過去五件の猟奇殺人事件と同一の犯人、又は同一グループによる犯行と思われた。

寝袋があつた東屋から死体発見現場の公園内通路に近い草陰まで、死体を引きずった痕跡がないため、被害者は何等かの理由で就寝中目覚め寝袋から出て草陰まで移動、その直後に殺害されたものであろう。

「なんて、こつた……とても、人間業とは思えん」

被害者を目前にして、馬場は眉を顰めた。馬場の横には、真新しい背広を着た新米刑事が、青白い顔をして吐き気に耐えながら突っ立っている。

「おい、何をばやっとしているんだ。早く、所持品を調べろ」

馬場は、間髪を入れず言った。

「は、はい」

新米刑事は、馬場の恫喝で吐き気をぐつと呑みこみ、スラックスの右ポケットから純白の手袋を取り出し両手にはめると、恐る恐る被害者のジャケットを探った。

被害者が着用していたジャケットのポケットから預金通帳と印鑑、キャッシュカードが発見された。預金通帳名義は、小林祐二であった。

通帳の残高は約三百万、やはり物取り目当ての犯行ではない。

「いったい、何のために、こんな惨い殺し方をしなきゃならんだ」

馬場の呟きはやるせない。

「や、やつぱり、連続殺人事件と何か関係が……」

新米刑事は言った。

「ああ、間違いないだろう。とにかく、この哀れな仏の身元を洗って、早く成仏させてやらんとな」

馬場は溜息を付くように言うと、青い空を見上げた。

その日の午後一時、第五回目の猟奇的殺人事件対策会議が開かれた。

警察は、引き続き現場周辺での聞き込みと目撃者探し、現場検証、被害者相互の関連性、及び異常犯歴者への事情聴取、また、近県警察本部と連携し都内全域に厳戒体制を敷くとともに、都内各公園の深夜警邏をさらに強化することとしたのである。

また、マスメディアを通じ深夜の出帰宅の自粛と、事件についての情報提供を呼び掛けた。

だが、警察の威信を掛けた必死の捜査にも関わらず、捜査は一向に進展せず、世間の非難は必然警察機構に集中したのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5235d/>

ナイトハンター

2010年12月4日05時19分発行